第31回 東京弁護士会人権賞 受賞

海老名 香葉子さん

「林家のおかみさん」としてテレビでお馴染みの海老名さん。その素敵な笑顔の奥には，幼少期の壮絶な戦争体験を乗り越えてきた深みがあります。涙（戦争）から笑い（落語）の世界へと至る人生を伺い，平和の尊さを実感しました。

（聞き手・構成：伊藤 敬史）

プロフィール◆えびな・かよこ
1933年生まれ。エッセイスト，作家。初代林家三平の妻として，夫の死後も林家一門の中心として活動する。長男・九代林家正蔵，次男・二代林家三平の母。

壮絶な戦争体験

―― 海老名さんには，2015年の東京弁護士会の戦後70年のシンポジウムで，ご自身の戦争体験についてご講演いただきました。幅広い活動の中で，戦争の体験を語り継ぐような活動もなさっていますね。

子どもを持って自分の子どもに特に伝えておきたいと思い，東京大空襲のあった3月9日，10日に，子どもを背負って「お母さんはこうだったのよ」と言いながら，自分の育った町を歩くようになりました。

戦後当初は，東京大空襲で家族を失って1人でしたから，人に語り継ごうというよりも，生きることで精いっぱいでした。

―― 戦争前のご家族の思い出をお聞かせくださいますか。

今よりも，ずっと家族の心が温かでございました。母は，家族のために，嫌な顔一つしないで働いていました。夜中は，大勢の家族の股引や靴下や足袋の継ぎあてといった針仕事を，寝る間を惜しんでやっていました。朝は一番に起きてご飯の支度。手をひびだらけにして，1日中働いていました。今思い出しても，嫌な顔一つせずになんて優しかったのだろうと，母の愛を感じます。私は，その母の背中を見て育ったので，生き永らえました。

それと子としての父の偉大さですね。父ちゃんは偉い人だ，父ちゃんは日本一の竿師*1で偉いんだって，心の中で誇りに思っていました。だから生きてこられたのかなと思います。

―― 温かいご家庭で育たれたのですね。そういう中で戦争になっていくのを，どんなふうにとらえていらっしゃいましたか。

昭和16年12月8日夕方，ラジオ放送で戦争が始まったと言っていました。私がうちへ入ると，兄たち3人は，「万歳，万歳」と言っているんですよ。「香葉子，戦争が始まったぞ，日本は勝つぞ」って。日本は神国だ。敵が攻撃してきたら必ず神風が吹いて撃沈させる。そう植え付けられていました。

―― だんだん戦争が激しくなって，海老名さんは，1人で沼津に疎開をされたのですね。その時はどんなお気持ちでしたか。

心のうちでは寂しいです。けれども，強がりを言ってね。沼津の叔母を頼って疎開したのですが，「叔母さんがいるから大丈夫よ。平気なんだから」なんてね。ただ，いざ別れる時になったら，母がぽろぽろ泣いて

＊1：父は，「竿忠」の名で知られる釣り竿職人の名匠だった。

いるんですよ。母は，私の手をぎゅーっと握って，「香葉子は強い子よ。だから大丈夫よ。いつもニコニコしているのよ。笑顔でいれば必ずお友達もいっぱいできるし，みんなに好かれるのよ，どんなときでも笑顔でいるのよ」と言いました。それは母のたっての願いのような感じがしました。

── お母様は何か感じるものがあったのですかね。

そうですね。空襲が始まっていた頃ですからね。この子との別れと思ったかもしれませんね。私はそんなふうに思いませんでした。叔母さんの家に遊びに行くような気持ちでね。

それで弟に，「こうちゃん，ねえねはお国のために疎開するんだからね。空襲警報が鳴っても，泣いちゃだめよ」と，ちょっと鼻が高いような気持ちで言いました。そうしたら，弟がとことこって歩いてきてね，おもちゃ箱から，ひょっとこの絵のメンコを持ってきて，くれたんです。「こうちゃんの大事なのをねえねにくれるの」と言ったら，「うん」と言って。それが弟の形見になりました。骨の行方も分からないし，写真もない。苦しかっただろうなと思うとやり切れませんね。あんな小さい子が，どんな思いで逝ったかなと思うとね。

── 東京大空襲では，11歳にして，祖父母，ご両親とお兄様，弟様を亡くされたのですね。

家族6人を亡くしました。

3月9日は，学校から家へ帰る途中，敵機が突然目がけてきました。私は，私の前で自転車に乗っていたおじさんに追い着くように，夢中で駆けました。そうしたら突然，飛行機が低空になったんですよ。音がウオオーッという感じでね。それで，夢中で農家の垣根に頭を突っ込みました。気が付いたら頭が熱いんです。手で払おうとしても，熱くて払いきれないので，防空ずきんを取ってバタバタってはたいて。それで自転車のおじさんを見たら，自転車の輪っかがぐるぐる回っていて，おじさんは倒れていました。その時，「おじさん，大丈夫」って言おうと思ったけど，声が出なくて，逃げちゃったんです。それがずっと心に引っ掛かっています。

叔母さんの家へ帰って，夕方になったら，警防団の人が「退避！退避！」と叫んでいるんですよ。叔母さんに「急いで」と言われて，けもの道を香貫山へ逃げ込みました。夜半，凍てつくような寒さでした。

その時「東京の方が赤いぞ！」という声を聞きました。香貫山のてっぺん近くまで行ったら，東京の方の空がぼーっと赤くなって。

── 東京が燃えているのが沼津まで見えたのですね。

4日目，学校から帰ってきたら，叔母さんが「香葉ちゃん，香葉ちゃん」って呼ぶんですよ。外を見たら，麦畑に三番目の兄がお化けみたいにぼーっと立っていたんです。唇が火傷でこんなにめくれちゃっていて。

「香葉子，みんな死んじゃったんだ，ごめん，ごめん，ごめん！」って。

兄は何度もごめんと言って泣きました。自分だけが生き残ったことが苦しかったんだと思いますね。

私は，「喜兄ちゃんだけでも生きていたから，よかったじゃない」と慰めたんです。

兄の背中を擦ってあげて，一緒に寝ました。一晩中泣いて。これからどうしようかなと思いましたね。

翌朝，「香葉子はここの叔父さん，叔母さんのところでお世話になんな。俺は帰るから」と言って，あてもないのに東京へすぐ舞い戻ってしまいました。それから3年，4年ぐらいは行方不明でした。

── 当時，そのお兄様はおいくつだったんですか。

小学校6年生から中学1年生になるときですね。

── その年齢で，東京で1人生き残って，妹さんのために沼津まで伝えに来て，また1人で帰っていく。その時の思いを考えると，想像を絶するようなことですね。戦争が終わったときは，どんな感じでしたか。

沼津の後に疎開した石川県の能登半島で，農家の廊下にラジオを出して，みんなで玉音放送を聞きました。ガアガアと聞こえて内容はよく分かりませんでした。

その時身を寄せていた叔父さんの仕事が海軍省でしたから，終戦ですぐ職を失いました。叔父さんと叔母さんの間には2人の子どもが居て，食べていくのも大変ですから，「東京の大きい叔母さんの家に行ってちょ

うだい」と言われました。

それで終戦の2カ月後に東京に帰りました。

――戦後の東京はどんな様子でしたか。

全部焼け野原で，もう愕然としましたね。町がこんなになっちゃったのかと。焼けた学校なんかがぽんとあるぐらいでね。

叔母さんの家は焼けトタンで囲った所で暮らしていました。そのころは人1人でも邪魔だったんですよ。二言目には，叔母さんから，「お前みたいな子は，死んでくれればよかったのに」と口癖のように言われました。

――ご両親を亡くされ，ご兄弟を亡くされた中で，そんなにつらいことを言われて，どんな思いで毎日を過ごしていらっしゃったのですか。

子ども心に，何で私が生き残っちゃったんだろうと思いました。

それでも母の言葉がありましたからね。いつもニコニコ，皆に好かれなくちゃいけないという。叔母さんに怒られても，「叔母さん，ごめんなさい」と言って涙なんか見せませんでした。

――11歳でご両親を亡くされた後，ずっと親戚の家を転々とされていたということですね。

そうですね。その後，浦和で子守をすれば新制中学に行かせてくれるという家に身を寄せました。でも小父さんが警察に護身術を教えていたのが，無職になっちゃったんです。子どもが年子で3人いて，その3人の子の面倒を見る方が大変で，学校なんかほとんど行かれませんでした。

――そういう中で，16歳の時に，生前のお父様と親交のあった三遊亭金馬師匠のお宅にお世話になったということですね。

うちの焼け跡に，「金馬来る　連絡乞う」という書置きがあったので，金馬師匠を訪ねて寄席の楽屋に行きました。金馬師匠は，「今日から，うちの子におなり」と言ってくださって，それから私のことを本当の娘のようにかわいがってくださいました。

それで私が18歳のときに，金馬師匠の家に来た林家三平の母が私のことを元気そうねと言ってくれて，金馬師匠の家から三平のところに嫁に来ました。

故三平師匠の思い出，子どもたちのこと

――亡くなった先代の三平師匠は，一言でいうと，どんな方だったのですか。

そうねえ…。とってもいい人でした。

――決して人の悪口は言わなかったそうですね。

絶対言わない。悪口を言うとすごく怒るの。悪口って面白いじゃないですか。人の悪口を言っていると，「そうよね」なんて，みんなで話しちゃうでしょう。でも，夫は絶対に悪口を言わなかった。それから賭け事は御法度。下ネタも御法度。

――お弟子さんたちに対しても，そうなさっていたのですね。

そうなんです。だからよそのお弟子さんが来て，下ネタ話をしますと，「うちはだめなんだ」と言っていますよ。今は，テレビで平気で下ネタをやっていますね。

――そういう番組が多いですね。

ねえ。私の夫のやっていた番組*2は当時「低俗番組」だと叩かれましたけれども，今から考えますと，とても健康的というか，家庭的で面白い番組でした。家族の中から歌の得意なおじいちゃんが出てきて歌うと，他の家族がそろって，チャンチャチャチャ，チャンチャチャチャって踊るの。それで1位，2位，3位と決めるんです。その番組が視聴率40％でした。

――すごいですね。先日，ご次男の二代 三平師匠の書かれた本*3を拝読したのですが，お父様が本当に優しくて，面白くて，その影響をとても強く受けたんだなと感じました。

あの子はお父さんっ子でしたから。夫が45歳の時の子なんです。9歳の時にお父さんが亡くなったものですから，かわいそうでした。

＊2：『踊って歌って大合戦』（日本テレビ，1965年～1966年）
＊3：二代林家三平著『父の背中－拙者のハンセイ』（青志社・2009年）

夫は亡くなる前にベンツに乗っていたのですが，あの子は「お母さん，ベンツに乗るとね，お父さんの匂いがするよ」と言うんですよ。乗ってみると，本当にお父さんの匂いがするの。「お父さん，生きているみたいだ」と言うのね。何だかかわいそうになったんですけど，そのベンツも売っちゃいました。全部きれいさっぱり売って，一から出直しました。

―― ご長男も，ご次男も，お父さんの後を追って噺家になられたわけですが，やっぱりお父さんの背中を見て育ったというのが大きいんですかね。

そうですね。お父さんが好きだったし，好きなお父さんが大好きな仕事を精いっぱいやって，大満足で大往生だと言って死んだんです。だからお父さんの仕事がいいと思っているんです。

僕は，皆さんに拍手してもらって，喜んでもらって，笑ってもらって，それで帰る時に「ありがとう」と言ってくれて，謝礼をいただいてくるんだから，こんなにいい商売はないねと言っています。

それには苦しみはありますよ。受けなかったら大変ですから。受けるように，日々勉強です。

時忘れじの集い，そして夢

―― 毎年，東京大空襲の日に「時忘れじの集い」を続けていらっしゃいますね。

はい，今年で13回目になります。

―― どういう経緯で始まったのですか。

私は，東京都平和の日記念行事検討委員会の委員になりました。それで手を合わせて拝める慰霊塔を造ってくださいと東京都に一生懸命お願いしましたが，なかなか実現しませんでした。だったら私個人で建てようと思いました。

それで上野の山を調べたら，寛永寺様の土地の真ん中に三角の土地が16坪あるんですよ。これだったら私でも買えるかなと思って，寛永寺様へ行きました。そうしたら執事長の浦井正明先生が，「気持ちは分かります。だけど，この16坪は，天海上人の毛髪所で，上野の起源みたいなところなのですよ」と。ところが，その後，「別の土地を無償で提供します」と連絡をくださいました。寛永寺様の土地を無償で提供なんてね。うれしいのを通り越して，もう涙ぼろぼろになっちゃってね。現龍院さんの山門のところの土地を無償でいただき，慰霊碑を建てることになりました。

そうしたら東京都から呼び出しがあって，「かねてからあなたが誓願している平和の母子像を建ててよろしい」と言うんですよ。「こっちも建てるんです」と言ったら，「でも許可を下ろします」と言うんです。えーっと思ったんですけど，思い切って2つ建てることにしました。こっちは平和の母子像，こっちは本当の慰霊碑。

―― その慰霊碑ができて，毎年集いをしているのですね。

はい。マスコミが取り上げてくださるので，それを見て，毎年いろいろな方が来られるんです。もう式典が始まっているのに，「おじいちゃんを今飛行機に乗せましたから，よろしくお願いします」という電話が長崎からかかってきたりして（笑）。去年は外国からも3組見えましたね。ニュージーランドからも取材を受けました。

―― そうやってどんどん広がっていくのは，とてもいいですね。

ええ，どんどん輪が広がっていますね。車も出して，お土産も用意するので，お金が掛かります。だから一生懸命働いているんです。働ける限り働いて，働けなくなったら，あとは息子たちにやらせます。

―― 海老名さんのご著書*4を読んでいたら，戦後100年まで生きたいと書いてありました。

この前，戦後70年でしょう。あと30年生きたいの。100年間，1世紀は，この戦争のことを伝えていきたいんです。だからあと30年生きます。

―― ぜひ，これからも長生きをなさって，今伺ったようなお話をぜひ多くの方に語り継いでいただきたいと思います。

＊4：海老名香葉子著『私たちの国に起きたこと』（小学館新書・2015年）